

第3回 ユースオリンピック夏季競技大会 (Buenos Aires 2018)
にみる“Athlete Education Programme”の実践と課題
-Olympism in Action Forum から見える今後の展望-

大津克哉*¹

Practice and Problems of the Buenos Aires 2018 Youth Olympic Games' "Athlete Education Programme": Future Outlook from the Olympism in Action Forum

by

Katsuya Otsu

Abstract

The point that separates the Youth Olympic Games (YOG) from other games is the inclusion of cultural activity programmes and education for the participating athletes. The intention of the International Olympic Committee (IOC) in including such activities is to, throughout the entire duration of the games, encourage character building and promote international goodwill and friendship among athletes from all participating nations and regions through participation in various programmes during their stay at the Olympic Village. It can be said that these games place greater importance on the education of, and exchange between, the athletes, rather than the outcome of the competition itself. Through observation at the site, this research focuses on and grasps the reality of the "Athlete Education Programme", which was developed at the 3rd Summer YOG. Furthermore, for the first time at the YOG, the IOC has made efforts towards the promotion of the Olympic Movement; stamping out foul play, including doping and match-fixing; and consistency, etc. The IOC also aims to provide the materials necessary to consider the relation between "the role of the YOG" and "sports and the sustainability of the environment" from the "Olympism in Action Forum", which discussed the problems currently facing the sporting world. Firstly, large-scale efforts made to carry out the environmental measures and educational activities, etc. throughout the entirety of the YOG were limited. Additionally, I found that today's concept of "sustainability" is not limited to factors such as

* 1 東海大学体育学部スポーツ・レジャーマネジメント学科

minimisation of environmental load, symbiosis with nature and promotion of environmental awareness, but also includes concerns towards human rights, work environments and supply chain management. While the Olympics have grown to become major events, considering the fact that the environmental load of the opening of the games continues to increase, no matter how much the IOC strives to carry out idealised educational activities, it has not gone far enough to help the values that the Olympic Games promote. To do so, it is all the more necessary for the IOC to be thorough, and raise awareness to the world of the importance of a healthy environment. As protecting the Earth's environment is an activity with no end, one that we must be conscious of long into the future, and one that requires continuity and fortitude, it is not so easy or quick to tell to what extent our efforts have born fruit. However, taking positive action against imminent concerns such as environmental problems is not limited to reforms merely within the sporting world, but it is also linked to the realisation of a sustainable society, and can be a model case that draws the attention of the future sporting world.

I. 序論

第3回 ユースオリンピック夏季競技大会 (Buenos Aires 2018) は、2018年10月6日から18日までの13日間、アルゼンチンのブエノスアイレスで開催された。Youth Olympic Games (YOG) とは、14歳から18歳の若手選手を対象とした、国際オリンピック委員会 (IOC) が主催する国際大会である。この大会が他の競技大会と異なる点は、競技と並行して、参加選手への教育及び文化的な活動プログラムが含まれることであろう。IOCはその意図として、参加選手には大会全期間中、選手村に滞在させ、多様なプログラムの体験を通じて世界各国・地域からの参加者らと国際親善や友好を深めるなかで、人間形成を促すことを狙いとしている。むしろ、勝敗よりも選手への教育や交流に重きを置いている大会だといえる。また、IOCは若者の身体活動やスポーツへの参加が世界的レベルで減少傾向にあることに対し、オリンピック・ムーブメントへの若者の関与が減少していることもその一因と見ている。したがってYOGは、今日の若者のニーズに対応し、次世代のオリンピックファンの関心を引きつけるような構成となっている。

筆者によるYOGで展開された「文化・教育プログラム」に関する一連の研究では、これまでに開催された大会 (夏季大会：第1回 (2010年) シンガポール、第2回 (2014年) 南京。冬季大会：第1回 (2012年) インスブルック、第2回 (2016年) リレハンメル) の視察を通して、プログラムの状

況を教育的側面から報告している。それらの報告では、2010年からIOCの新しい試みとしてスタートした若者版スポーツの祭典「ユースオリンピック」の様子について、我が国では現地の盛り上がりについての報道が少ないばかりか、なかでもYOGで重要な役割を担っている「文化・教育プログラム」についての活動内容や参加状況、さらに日本の若いアスリートたちがユースオリンピックで何を学んだか、ということが全く伝えられていなかったことを指摘した。さらにメディアの取り扱いについては、ネームバリューがまだ無いアスリートを題材にすることは厳しく、結局のところトップ選手の勝ち負けしか興味がないということを批判した。さらに参加選手たちに向けて、大会に参加する前の段階からオリンピズム (オリンピック精神) やオリンピック・ムーブメント、YOGで展開される文化・教育プログラムの内容についてどれほど学習をしてきているのかといった事前教育の体制や、同行する監督やコーチらが競技を控えている選手に対してプログラムへの参加を勧めるのかといった点からも、現地での競技とプログラムとの調整には課題が残り、全選手が公平にプログラムに参加できる方法には検討の余地が残されている。

今回の研究では、第3回夏季ユースオリンピック競技大会 (Buenos Aires 2018) で行われていた、文化・教育プログラム「Athlete Education Programme (以下、AEP)」について、会場の視察を通してその実際を把握する。さらにこの研究資料

は、YOG 開幕に合わせて、同じくブエノスアイレスで世界各国のアスリートやスポーツ関係者、研究者、政府関係者などが一堂に会し、2日間の日程でオリンピック・ムーブメントの推進や、ドーピング、八百長問題などの不正撲滅、持続可能性への取り組みなど、昨今スポーツ界が抱える問題について議論された「Olympism in Action Forum」の内容を報告するとともに、今後のYOGが果たす役割や展望について概観しようとするものである。

II. 大会の全般的概要について

IOCがYOGを新設した背景には、若者の深刻なスポーツ離れに対する現状の打開や、勝利至上主義をはじめ、ドーピングの蔓延、オリンピック大会の肥大化など、現在のオリンピックが抱える諸問題に対して歯止めをかけることが目的であり、競技だけではなく文化・教育プログラムを通して、スポーツの意義やスポーツの楽しさ、国際交流を実感させ、オリンピズムへの原点回帰を目指すものである。そして、2007年7月にグアテマラシティで開かれたIOC総会において、当時のIOC会長であったジャック・ロゲによって提唱され、創設が認められた。ロゲ会長が「ユースオリンピック競技大会の創設は、今日と未来の若者に対するIOCのコミットメントが言葉だけに終わることなく実行されようとしていること、そして、オリンピック競技大会の精神に基づき、若者独自のイベントが若者自身の手によって提供されようとしていることを示している。YOGは、若きアスリートたちの健康を守るべく慎重に選ばれた競技種目による、まさに若者のための革新的な競技大会となるのみならず、聖火リレーや賛歌、旗といったオリンピック・シンボルにより、若者たちを奮い立たせる大会となるだろう¹。」と述べているように、YOGはIOCの肝入りイベントとして位置付けられている。その後、IOC会長に就任したトーマス・バッハ（2013年9月～）もロゲ体制を引き継ぎ、オリンピックと同じく夏季・冬季に分かれ、現在のところそれぞれ4年ごとに定期開催が続いている。

IOCは2014年12月、モナコで開催された臨時総会において、オリンピックの改革案として中長期

の活動指針を示した「オリンピック・アジェンダ2020 20+20の提言」を決議した。そこでは、オリンピック競技大会の開催に伴うコスト面や地球環境に対する各種の影響についての検討がなされ、大会の規模やコストを削減し運営の簡素化（既存施設の最大限の活用、および大会後に撤去が可能な仮設による施設の活用）を図ることを積極的に奨励している²。とりわけYOGに関しては、通常のオリンピック大会が開催できない小さな都市でも開催が可能となるために、競技は既存の施設を利用されなければならない、一時的な選手村等を除いて新規施設の建設を行ってはならないという原則が働いている。なお、IOCは今回のYOG大会期間中に総会を開き、2022年夏季ユースオリンピックの開催都市にセネガルの首都ダカールを正式決定した。周辺2都市を含む開催計画で、オリンピックの名を冠した大会のアフリカ開催は初めてとなる。

1. 参加国・地域と参加人数、実施種目について

第3回 ユースオリンピック夏季競技大会には206の国と地域から選手が派遣され、3,926名が参加した。なかでもオリンピック史上初めて、男性と女性アスリートの参加率が均等になったのも本大会の大きな特徴の一つとして挙げられる。さらに実施種目も前回の中国・南京大会（28競技222種目）から32競技241種目へと増加した³。ブエノスアイレス2018ユースオリンピック組織委員会（BAYOGOC）の要請で、ローラースポーツ、ダンススポーツ、空手、スポーツクライミングの4競技が新たに加わっている。さらに、新種目としてカイトボーディング、ビーチハンドボール、BMXフリースタイルも加わった⁴。このようにYOGで争われるスポーツは、通常のオリンピック大会で実施されるものと同じであるが、例えば3人制バスケットボール3x3のように、種目の改変やルールの変更が見られるなど、若者向けに通常のゲームとは異なる形式で実施していることも試みの一つである。また、男女混合の種目や競技によって実施されるIOC承認の国内・地域オリンピック委員会（NOC）混合種目もあり、NOCという枠組みを超

えた競技参加が推進されていることも YOG ならではといえる。

2. 競技会場について

会場は 4 つのパーク（ユースオリンピックパーク・アーバンパーク・グリーンパーク・テクノポリスパーク）と 4 つの独立した競技場（セーリング・ゴルフ・ラグビー・サイクリング/ローラースケートイング）に分かれて開催されている（写真 1）。



写真 1 聖火台が設置されているユースオリンピックパーク

なお、パーク内の各競技会場の間は徒歩で移動できる距離にあるため、観客は知らないスポーツにも触れられる機会がある。なかでもアルゼンチンの中心部に位置する「アーバンパーク」は評価も上々のようである。この会場では 3 人制バスケットボール、自転車 BMX フリースタイル、スケートボード、ブレイクダンス（ブレイキン）、スポーツライミングなど、若者に人気の都市型スポーツが実施された。試合の観戦は無料であるが、パークへの入場のために YOG 入場パス取得の事前登録が必要となっていた（写真 2）。



写真 2 来場の際には事前登録の ID パスを入手する必要がある

ただし、これらの試合をはじめ、大会の各種情報を得るために大会アプリを活用しても、何の種目がどこで何時から開始されているかなどの情報があまりにも少なく、情報収集が困難であった。

3. 開会式で展開された文化プログラム

ここでは、ブエノスアイレス大会における文化プログラムの内実を開会式に焦点当てて、みていこう。第 3 回目を迎えた YOG の開会式は 10 月 6 日夜 8 時から行われた。会場は、独立記念日の名を冠した、市内を南北に貫くヌエベ・デ・フリオ（7 月 9 日）大通りとコリエンテス大通りが交差したところにそびえ立ち、街のシンボルとなっているオペリスクを背に舞台が設置された。本大会は開会式を通常の競技場ではなく、市内中心部の大通りで開催したことはオリンピック史上初の試みである。これまでの開会式はスタジアムで行なわれ、高額な入場料を払わなければ観ることができなかった。しかし今回は、舞台が設置されたメインステージ周辺のエリアには IOC パスやメディアパス、または事前の申し込みが必要なインビテーションチケットが無ければ入れないものの、ステージから離れた場所であれば誰もが無料で観ることができ、確かに画期的で開かれた大会であるといえよう。その成果が、訪れた観客者の数にある。オペリスク大通りは片側 4 車線とバスレーン、緑地帯で構成される道路の総幅は 120 メートル以上あり、歩行者は一度の青信号では渡り切れないことで有名なほどだ。そのような広いエリアであるものの、当日、その周辺一帯は来場者で溢れかえっていた。後日、IOC の報告によると開会式に訪れた観客は 215,000 人に上るとい⁵。肉眼では舞台を見ることができない離れたところにも大型モニターが設置され、まるで大がかりなパブリックビューイング会場の様相となっていた。ただ一方で、メインステージ以外ではセキュリティチェックはなく、不特定多数の来場者が群集となっているためにセキュリティの面では不安は拭えない。

開会式は、アルゼンチン国歌に合わせてオペ

リスクの先端から国旗を掲げた人物が歩いて降りてくるという演出からスタートした。舞台スペースが狭いために、街のシンボルであるオペリスクを最大限に活用し、プロジェクトマッピングが駆使され、映像とワイヤーで吊るされたパフォーマーによる演出で観客を魅了した。また、選手入場では全員参加型でなく、各国の旗手1名だけがステージに上がって紹介された程度であった。IOC会長のスピーチに続き、アルゼンチン大統領による大会開会宣言、選手代表宣誓、審判代表宣誓、コーチ代表宣誓へと続き、プロトコール終了後はアルゼンチンを代表するアーティストによる華やかなパフォーマンスが披露された。これまでのYOG開会式の演出プログラムでは、オリンピズムの3本柱の一つである「環境」についてのメッセージが発信されていたが、今回は取り扱われていなかった。むしろ、オリンピズムを体現した内容というよりは、派手にデコレーションされたトラックがバスレーンを行ったり来たり、パフォーマーが会場を盛り上げようと観客を煽ったり、ダンスを披露するなど、パレード的な要素が強かった。

本来、オリンピック大会は、選手や関係者をはじめ観客に対しても、人類の将来の生存と繁栄にとって差し迫ったグローバルな課題に対する関心を高めることが期待できる。この観点からすれば、オリンピック・ムーブメントの教育機能としての開会式の在り方や、文化プログラムに着目することは、オリンピックのあるべき姿や理念を再考する上でも重要であると考えられる。

Ⅲ. 文化・教育プログラム“Athlete Education Programme”の概要

YOGを象徴する、文化・教育プログラムの名称はこれまで度々変更されている。元々はCulture and Education Programmeの頭文字をとって“CEP”と呼ばれていたが、2016年にノルウェー・リレハンメルで開催された第2回 ユースオリンピック冬季競技大会では“Learn & Share”に名称が変更された。そして今回、ブエノスアイレスユースオリンピック夏季大会では“Athlete Education Programme”

(以下、AEP)という名称のもと、スポーツと文化、教育を融合させたイベントとして、5つの教育テーマ(①Athletes 365、②Performance Accelerator、③Media Lab、④IF Focus Day、⑤Chat with Champion)が用意された。ほとんどのものがユースオリンピックパークにある選手村内の広場で行われている。参加選手たちには、競技の合間などに様々なAEPのアクティビティへ積極的に参加してもらい、世界各国・地域の選手団や大会開催地の人々との友好と親善を深め、さらにその経験を他の世界中の人々とも共有することを目的としている。ここでは、AEPの内実に焦点当てて、みていこう(写真3)。



写真3 AEPが実施されている選手村の様子

1. アスリート専用システムの“YOGGER”について

すべての選手及び監督・コーチ等は、到着するとYOGGERと呼ばれるデバイスが大会組織委員会から配布される。このデバイスの中には自身のプロフィールをはじめFacebookやTwitterなど、ソーシャルメディアのアカウントなどを登録することができる。さらにこのデバイスはワイヤレス機能を有しており、センサー部分を互いに合わせると登録データの交換が可能のため、簡単に他の選手と交流ができる機能を備えている。また、AEPのアクティビティに参加する際には、会場にあるタッチボードに自身のデバイスであるYOGGERをタッチするとポイントが加算され、プログラムの

参加数に応じて特製デザインの YOG ブエノスアイレス 2018 ヘッドウェア、タオル、バッグ、バッテリーチャージャーなどの大会限定グッズを手に入れることができる。加えて、参加選手向けのプラットフォームである IOC の「Athlete365」へのアクセスが可能になり、全てのイベントスケジュールやバニユーなど詳細な情報を得ることができる（写真 4, 5, 6）。

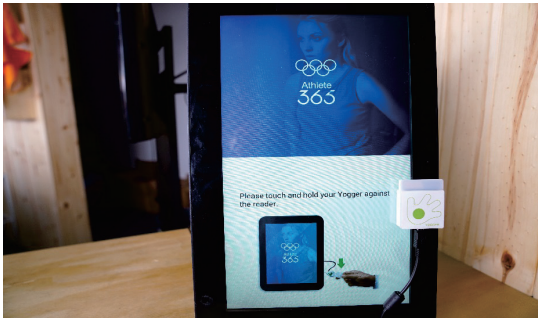


写真 4 デバイスを活用して大会に関する情報を得ることができる



写真 5 AEP の参加賞は 4 種類の限定グッズ

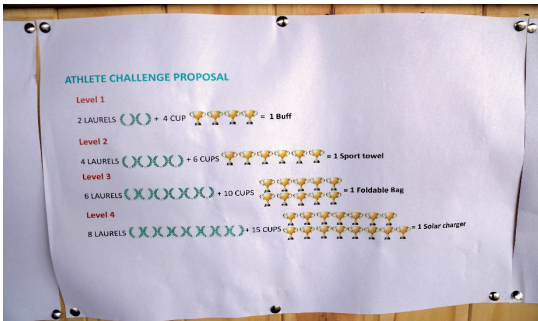


写真 6 AEP の参加数に応じて限定グッズを手に入れることができる

2. AEP の詳細について

ブエノスアイレス大会で展開された AEP は、受け身のセミナー形式 だけではなく、ゲーム形式の参加型ワークショップなど積極性が求められるものも組み込まれていた。なお、各教育テーマの詳細は以下の通りである（写真 7, 8, 9, 10）。

1) Athlete365

このワークショップの焦点は、フェアプレーや八百長の防止、アンチドーピングに関する情報提供、さらにはあらゆるハラスメントに焦点を当てたアスリートへの注意喚起についてなどである。アスリートはアドバイスを参考にしながら、自身の今後のキャリアマネジメントのヒントを得て、スポーツ分野で仕事をする機会やスポーツにどう還元するかなど、スポーツを通じて働く多くの可能性を見つけることができる（写真 7, 8, 9, 10）。

2) Performance Accelerator

アスリートは、より効率の良い競技練習に取り組むため、トレーナーから専門的なアドバイスを受け、競技パフォーマンスの向上のために、怪我のリスクを最小限に抑え、予防する必要があることを学ぶ。

3) Media Lab

アスリートがソーシャルメディアを用いて、自分の考えや行動を周囲と共有、他者との繋がりの強化や自らについて発信することを学習するメディアトレーニングの企画である。そして、個人の生活の中でデジタルソーシャルメディアを最大限に活用する方法を学ぶ。

4) IF Focus Day

さまざまな国際競技連盟や協会 (IF) のアスリートやコーチらが担当し、スポーツに特化した話題や活動が紹介される。自身の専門外のスポーツについて知ることで、新たな発見に繋げることを目的としたプログラムである。

5) Chat with Champion

オリンピックのアスリートとパネルディスカッションや質疑応答を通じ、経験とアドバイスをシ

エアする。その選手がこれまで困難に直面した時期にどう乗り越えてきたかなど、アスリートの体験談を参考にして自身のキャリアに活かすことを意図している。



写真7 AEPの会場には多くの選手たちが集まっている



写真8 AEPに参加中の選手たち



写真9 トレーニングの方法について専門家から指導を受ける



写真10 IFのFocus Dayでは水泳連盟が発表を行っていた

選手たちに、これらのプログラムに参加を促す重要な役割を果たすのが「ヤングチェンジャー」（こちらもこれまでは「ヤングアンバサダー」と呼ばれていた）だが、彼らの存在は大きい。大会に関わるのは選手やコーチ、役員だけではない。それは、ヤングリポーターやヤングチェンジャーの存在である。ヤングリポーターは、将来スポーツジャーナリストを志す若者を対象に、IOCが選考を行い、トレーニングを受けた後、実際に競技やAEPの様子を取材しメディアにアップする役割を担う。まさにIOCによるジャーナリスト養成のためプログラムであり、本大会には34名のレポーターが活動した。また、ヤングチェンジャーとは、18歳から25歳の若者を対象に各国のオリンピック委員会から1名が推薦され、IOCの承認を経て選出される。今回は81名が選抜された⁶。彼らの役割は、選手たちと共に選手村に滞在し、大会組織委員会と協同しAEPをよりスムーズに行えるよう大会前から内容について検討を重ね、大会期間中には自国の選手たちのサポートおよびAEPへの参加を促すことである（写真11）。



写真 11 AEP への参加を促す日本選手団の掲示板



写真 12 学校のクラス単位で多くの子どもたちが来場していた

これまでの YOG では、文化・教育プログラムの中に植樹（第 1 回夏季大会 シンガポール 2010）や発電（第 2 回夏季大会 南京 2014）といった内容は異なるものの「環境」への啓発は、第 1 回大会から継続されており、アスリートへの環境教育の一面としても期待されていた。

それは、オリンピズムに「環境」が加わり、それに呼応して IOC の組織内に環境問題を扱う個別委員会が設置された背景からも、環境への取り組みが重要視されていたことがみてとれる。しかし本大会では、開会式式典における演出プログラムと同様、取り扱いは無かった。

3. 一般参加型の文化・教育プログラムについて

大会期間中各会場には、連日子ども連れの家族はもちろんのこと、平日にもかかわらず学校のクラス単位での来場も多く見受けられた。なぜなら大会組織委員会は、“The School goes to the Games programme” を実施しており、子どもたちを会場へ連れだし、新たなスポーツの体験を呼びかけていたからだ。会場にはアーバンスポーツの体験コーナーが準備されており、3×3をはじめ、インラインスケートやスケートボード、ローイング、さらに高い柵を越えたり、壁をよじ登ったりして、より早く目標の地点を目指すパルクールという新たなスポーツなどの体験イベントを行っていた（写真 12, 13, 14, 15）。



写真 13 バスケットボール（3×3）の体験コーナー



写真 14 インラインスケートの体験コーナー



写真 15 ローイングの体験コーナー

競技会場は満員御礼で、そのほとんどに入場制限がかかり、パスがあっても試合会場に入れない光景もよく目にした。その代わりに、一般参加型の文化・教育プログラムのブースを訪れ、子どもたちは積極的に参加しているようであった。また、会場の一つであるユースオリンピックパーク内のオリンピックセンターには、子どもたちが遊びながら学べるような様々な工夫がなされたテントが連なっていた。例えば、国際連合児童基金 (UNICEF) のブースでは、コンピューターゲームを通じて参加国・地域やYOGの種目について学ぶことができる。国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) のブースには、2016年のリオデジャネイロオリンピックで初めて結成された「難民オリンピック選手団」を紹介するパネル展示がされていた。UNHCRのブースでは、リオ大会に難民選手団の一員として参加したシリア出身、ユスラ・マルディニ選手(水泳)が広報活動を行っていた。さらに国際オリンピック・アカデミー (IOA) のブースでは、オリンピズムの普及・教育やオリンピック研究について、活動の様子を来場者に説明していた(写真16, 17, 18, 19)。最終的には、YOG大会期間中に子どもたちが色々な会場を訪れ、新たな学びやスポーツに挑戦した人数は200,000人にも及ぶ⁷。



写真 16 会場内には子どもたちが遊びながら学べるブースが設置されている



写真 17 UNICEF のブースではコンピューターゲームを通じてYOGについて学べる



写真 18 UNHCR のブースではシリア出身のユスラ・マルディニ選手が広報活動を行っていた



写真 19 IOA による来場者へのオリンピズム普及のためのブース

IV. YOG アルゼンチン大会にみる環境問題への取り組み

BAYOGOC は、持続可能なYOGを開催するため、開催前からの取り組みとしてブエノスアイレス市内周辺にペットボトルの回収ボックス「グリーンポ

イント」を設置した。集まったボトルは粉碎され、再生プラスチックボトルの素材として利用し、3Dプリンターで礎石を制作して選手村の竣工式にあわせて披露されている⁸。また、選手村内には、使用済みの小型家電を使って製作された地球のオブジェが展示されていた（写真20）。



写真 20 選手村に展示されている廃品から製作された地球のオブジェ

さらに、一般向け環境教育活動の一環として、ブエノスアイレス市内の北部にある公園地区「ボスケス・デ・パレルモ」に位置するグリーンパークでは、環境保全をテーマにしており、IOCのトップスポンサーであるトヨタが、環境技術に関する展示を実施していた。大会公式車両にも使用されているプリウスを展示し、ハイブリッド車を紹介するほか、持続可能な社会の実現に貢献するための新たな企業のチャレンジとして策定している「トヨタ環境チャレンジ2050」に絡め、子どもを対象に、楽しくサステナビリティについて学べるアクティビティを実施した。

しかし、インフラ面においては、既存施設の活用や会場内での2分別ボックスが設置されている程度にとどまっていた（写真21）。



写真 21 会場に設置されている2分別のボックス

V. Olympism in Action Forum から見える今後の展望

今回は YOG 開催に先駆けて、IOC の初の試みである「Olympism in Action Forum」が10月6日、7日の2日間に渡り開催された。この会議は幅広い分野に及ぶ研修やシンポジウム形式で進行されたが、スポーツと環境の持続可能性やスポーツを通じた平和の構築、さらに目下スポーツ界が直面しているハラスメントや性的虐待、女性のスポーツ参画、オリンピック難民チームの編成、これまでに IOC が取り組んできたアンチドーピングの運動などについての問題提起がなされた（写真22, 23, 24, 25）。



写真 22 潘基文前国連事務総長による平和をテーマにした講演



写真 23 ロシアによる組織的なドーピング問題について発表者が Skype で参加した



写真 24 女性のスポーツ参画について議論された



写真 25 オリンピック難民チームのメンバーが登壇した

今回の Olympism in Action Forum は、2014 年 12 月にオリンピックの中長期改革計画として公表された「オリンピック・アジェンダ 2020」の見直しも兼ねた会議の様相であった。なかでも活発に議論がなされた点は、「招致に際し既存の競技施設や一時的会場の活用を促進し、開催都市や開催国以外での一部競技の開催を認める」、「男女平等の観点から男性と女性の参加率 50% を目標とし、男女混合団体種目の採用を推奨する」、「性的志向による差別の禁止を徹底する」、「選手育成の観点から、YOG の使命や位置づけや財源などの見直し」、スポーツを通じた教育観点では、「国連教育科学文化機関 (UNESCO) との連携」などといった非常に多岐にわたる内容である。また、これまでの IOC の会議においては、IOC の活動反対派をパネラーとして登壇させるといった姿勢は見られなかったが、過去のオリンピック大会の開催都市ならびに今後

予定されている大会の関係者らと、2024 年の大会招致に名乗りを上げていたボストンの反対派グループである「No Boston Olympics」との議論に現れるように、これからの IOC ならびに開催都市はあらゆる人々に説明責任を果たしながらオリンピックを実施しようとする姿勢がみられたのは、時代の趨勢かも知れない (写真 26)。



写真 26 オリンピック大会の開催都市関係者による議論

さらに SUSTAINABILITY のセッションでは、「スポーツによる持続可能性」と題し議論がされた。パネラーの一人には 2017 年より IOC の公式カーボンパートナーに選ばれた DOW から、テクノロジー&サステナビリティ部門のディレクターが加わり、IOC の活動やオリンピック・ムーブメントに関連する二酸化炭素排出量を相殺するための、世界規模の二酸化炭素削減プログラムが紹介された。さらにイベントに関するライフサイクル全体における温室効果ガスの排出量を「見える化」し、カーボンフットプリントとして算定する意義と展望について語られた。オリンピックの開催に伴い、排出量の把握や対策の実施は、持続可能な社会に対する大会の義務になると考えられる。立候補段階からカーボンフットプリント量を概算、把握し、それに対する削減対策を具体的に提示することは、開催地となる上で重要な観点の一つになると考えられる。今後 IOC をはじめ、オリンピックを取り巻くステークホルダーを巻き込んだ環境対策には真剣に、そして速やかに向き合わなければならないことが確認された。

VI. まとめ

今回の研究では、2018年10月に行われたYOGで展開された文化・教育プログラム「AEP」について着目し、会場の視察を通じて、プログラムの現状を調査、把握するとともに問題点を明らかにした。さらにYOG大会前に開催された「Olympism in Action Forum」から、今後のYOGが果たす役割やスポーツと持続可能性についての展望について検討した。

YOGの開催は、オリンピック憲章に掲げられたIOCの使命、すなわち「オリンピズムを世界中に広め、オリンピック・ムーブメントを指導すること」に応える絶好の機会であることは間違いない。例えば、これまでのYOGの夏季・冬季大会では、競技の参加だけにとどまらず、オリンピズムについて理解を深める「文化・教育プログラム」の中に、昨今問題となっている環境問題の解決に向けて、ゲーム形式などで楽しく学べる機会が提供されていた。しかし、環境の保護など、地球規模の問題への取り組みに貢献するための啓発を促すプログラムとして位置づけていたものが、本大会では開会式式典における演出プログラムと同様、取り扱いは無かった。

今日の「持続可能性」の概念は、環境負荷の最小化や自然との共生、環境意識の啓発など、従来の環境的側面だけではなく、人権や労働環境への配慮、サプライチェーンの管理に至るまで、意義が拡大していることが分かる。オリンピックはこれまでメガイベントとして肥大化していった一方で、大会開催自体が環境負担を高めている現状を考えると、IOCがいくら理想的な啓発活動を行っても、オリンピックの理念そのものを救済するには至っていない。そのために、世界に向けて健全な環境の必要性に対する認識を高め、徹底することが、より一層求められる。

また参加選手へ展開されるAEPについて、日本選手団は、特に語学の問題で引っ込み思案なところが心配されていたが、日本のヤングチェンジメーカーのヒアリングからは、最近では海外を転戦する選手も多く、積極的にコミュニケーションを取れるようだ。徐々にYOG出身者が通常のオリンピック大会に参加する機会も増えてきている。その

ために、早期からオリンピズムを正しく理解し、若きロールモデルとして活躍できるオリンピック像が期待される。選手たちにおいては、競技そのものの感想はもちろんであるが、選手村での交流やAEPで体験した楽しさや発見など、現地で感じた様々なことを周囲の人たちに伝えることが代表選手として本大会に参加した者に与えられたミッションといえる。YOG出身者のオリンピックが次世代のリーダーとなり、オリンピック・ムーブメントを広めることで、彼ら自身がレガシーになっていくものと考えられる。

こうした若い世代へのオリンピック教育の重要性を認識し、継続した実践を重ねていくことがYOGに求められる役割であり、YOG大会組織委員会が実践的かつ戦略的な計画を立て、IOCもそれを支援することが「オリンピックの持続可能性」といった未来への展望をもたらすことになる。すなわち、それらを推進していくことがクーベルタンの理想を出発点とした、「スポーツを文化と教育と融合する」というオリンピズムの指針を体現することに繋がるのではないか。

本研究は平成28年度～32年度 学術研究助成基金助成金 基盤研究(C) (一般)を受けて行われたものである。

参考・引用文献

- ¹ The Department of Communications, International Olympic Committee (2007) 1st Summer Youth Olympic Games in 2010, p3
- ² International Olympic Committee (2014) Olympic Agenda 2020 - 20+20 Recommendations 日本語版, http://www.joc.or.jp/olympism/agenda2020/pdf/agenda2020_j.pdf
- ³ 公益財団法人 日本オリンピック委員会 (2018) 第3回 ユースオリンピック夏季競技大会(Buenos Aires 2018) 日本代表選手団ハンドブック・名簿
- ⁴ International Olympic Committee (2018) THE YOG - FACTS AND FIGURES
- ⁵ International Olympic Committee, BUENOS AIRES 2018 IN NUMBERS -IOC NEWS 19 OCT 2018.

<https://www.olympic.org/news/buenos-aires-2018-in-numbers> (最終閲覧日 2018年12月2日)

⁶ International Olympic Committee, YOUNG CHANGE-MAKERS THRILLED BY BUENOS AIRES 2018 EXPERIENCE -IOC NEWS 7 DEC 2018.

<https://www.olympic.org/news/it-s-great-that-the-ioc-believes-in-you> (最終閲覧日 2018年12月10日)

⁷ International Olympic Committee, BUENOS AIRES 2018 IN NUMBERS -IOC NEWS 19 OCT 2018.

<https://www.olympic.org/news/buenos-aires-2018-in-numbers> (最終閲覧日 2018年12月5日)

⁸ International Olympic Committee, BUENOS AIRES 2018 BEGINS WORK ON THE YOUTH OLYMPIC VILLAGE -IOC NEWS 9 MAY 2018.

<https://www.olympic.org/news/buenos-aires-2018-begins-work-on-the-youth-olympic-village> (最終閲覧日 2018年12月1日)